

實際について見て來なければならぬ。特に思考の一般形式がこの期に定まるとすればこの時期の取扱は甚だ重要である。その他種々附言したい事が

あるが、あまり長くなるから茲に擱筆して、多くを賢明なる讀者諸君の判斷にのこして置く。

『トム・ソーヤ』(二)

——英文學に現はれたる子供(十七)——

岡 田 み つ

(正月號に掲載したので、續きと御承知願ひます)

トムは、ボリー伯母さんの所へやつて來た。伯母は寢間。茶の間、書齋兼用の奥まつた陽氣な一室の、開け放した窓近く、坐つて居た。そよ吹く夏の風、四邊の静けさ、花の香、蜂の薄眠い囁きが、影響を及ぼして、伯母は、編物をしながらコツクリ／＼居眠つて居た。猫の他に相手が無いのに、猫までが伯母の膝の上で交睫^{まじく}んで居た。伯母の眼鏡は大事をとつて、白髪頭の上に押し上げてあつた。伯母はトムが疾くに仕事を捨て、出奔し

た事と思ひきつて居たのに、かうやつて、不敵に

も態々自分の方から、叱られにやつて來たのを不思議に思つた。トムは、

「もう遊びにいつでも宜いだらう。伯母さん」

と言つた。

「何え。もう？どれ程爲たのだへ？」

「すつかり出來てしまつたの。」

「偽言^{うそ}を御吐きでない——偽言^{うそ}だけは止して御く

れ」

「偽言ついてやしない。すつかり出来てしまつたの。」

ポリー伯母さんは一向信用しなかつた。で、自から検査しに出掛けて行つた。トムと言ふ事の四半分でも、眞實だつたら、其で満足したらうに、これはまた、塀全體に白ベンキが塗つてあるばかりか、仰々しく、二重にも三重にも塗つてあつて、御まけに地面まで白く一筋引いてあるので伯母の驚愕は、非常なものであつた。

「まあ。思ひ掛けもない。」トムや、御前は氣が向けば働くのだね。」と賞めて置いて、次の句で其を落して言ふには「だが御前が氣が向く事は滅多にないのだ。まあ、いゝワ。行つて遊んで御出で。而してその内に家へ戻つて來ないと非道いよ。」

伯母は、トムの働きの美事なのに吃驚して、トムを戸棚へ連れていつて、上等の林檎を撰り取つて渡しながら、惡戯をしないで、眞に働いて得た

褒美の有難味や、嬉し味を説いて聞かせた。而して伯母が例の通り、聖書の句を擔ぎ出して御説法に括りを付けてゐる中に、トムは、ドウナツト（油で揚げた菓子）を一つ、こつそり釣り取つた。

トムは家を飛び出した。その途端にシッドが、二階の裏部屋へ通るやうになつて居る戸外階段を、上りかけて居るのを見付けた。土塊は手近にあるので、トムは、之屈強と其を投げ付けたので、瞬く間に空中に泥が撒きちつて、殊にシッドの身邊には霰のやうに繁く降つた。あつけに取られたポリー伯母さんが、僅に事の譯を悟つて、救助に駆け付けた頃には、六七の土塊がシッドに當つて、トムは疾くに塀を乗り越して見えなくなつて居る。門もあるのだが、トムは大抵いつも大急ぎなので、門を出入りする暇はないのである。シッドが黒糸の事を言ひ出して自分に迷惑を掛けた怨は、之で「あいこ」になつた、とトムは心清々しく覺えた。

トムは、町の一區劃を曲がつて、自宅の牛小屋

の裏へ續く、路の悪い細道へ出た。もう捕まつて小言を言はれる氣遣ひなしと安心して、廣場へと

スケエナ

急いで行くと、其處には小年軍が二隊、豫約通り、今や戦を始めやうとして居た。トムは、甲軍の大將で、ジョー・ハーバー（トムの親友）が乙軍の大將であつた。兩大將と、も自ら手を下して戦ふなども不思議な事をしないで、――其は年下の「へぼ」に相當な仕事だから――其處に坐を占めて、傳令使に命を傳へて軍の指揮をしてゐた。トムの軍は、長い激戦の末に大勝利を得た。それから死者の數を検し、捕虜を交換し、次回の不和の條件を相談し、その結果としての一戦の日を取極めて兩軍ともに隊伍を作つて、靜々と陣地を引上げたので、トムも獨り家へ戻つた。

夕食の間、トムがはしやいでゐるので、ボリー伯母さんは此子は如何したのだらうと怪しがつてゐた。シットに泥を打付けたとして烈しく叱られても、一向に平氣でトムは、伯母の目の前にある砂

糖をつまみ出さうとして、遂に伯母に手先を打たれた。

「伯母さんは、シットが砂糖を取つても、打たないんだナ」とトムはいつた。

「さうさ。シッドは、御前のやうにうるさく人を困らせないもの、御前は、私が見て居ないと、いつでも――その砂糖壺に手を入れる。」

といつて、伯母は臺所へいつてしまつた。その留守に、シッドは叱られないといふ保證に安心して、砂糖壺に手を伸した。その様子が之見よがしなので、トムは口惜しくて堪らなかつた。處がシッドの手が之つて、壺は落ちて、破れてしまつた。

トムの狂喜の體といつたら、言語も出さず黙してゐる程であつた。「伯母さんが來ても、僕は一言もいはないで黙つて居やう。伯母さんが誰が爲たのだといふと、彼奴が返事をするだらう。而して彼奴が叱られる處を見るんだ。之程愉快な事があらうかと。」考へて居た。伯母が入つて來て、破れた

壺を眺めては、怒りの電光を眼鏡の上から發射してゐる間、トムはもう黙つて居られぬ程に嬉しくて／＼堪らず「それ始まるぞ」と獨語してゐると、トムに急に床に打仆されてしまつた。オヤ！と思ふ間に、伯母の手が再び打たと振り上げられたので、トムは大聲に、

「御待ちよ。伯母さん。何だつて僕を打つの。シッドが破したンではないか！」

ボリー伯母さんは困惑して、手を止めた。トムは、伯母が氣の毒がるかと待つて居たが、伯母口をきいた時には「うむ！打たれても損では無からう！。私が知らぬ間に、どれ丈太い悪い事をして居るか知れないもの」と言つた切りであつた。

併し伯母は心が咎めて、トムに優しい言葉を掛けてやりたいとは思つたが、さうすれば自分の惡かつた事を自白するやうに、トムに取られて、却て訓練にならぬと考へた。それで止むを得ず黙つ

てゐて、心を痛め／＼用事をして居た。トムは拗ねて隅に引込んで、自分の禍を得意で居た。伯母が内心自分に對して詫言をしてゐるのを承知してそれをよい氣味だと思つて居た。而して此方からは、素振にも心の中を見せず澄して居やうと定めて伯母が時々哀な涙ぐんだ目付をして自分を見るのを勘付いて居ながら、態と知らぬ振りをしてゐた。而してトムは自分が死にさうに病み煩つて居るところを想像して、伯母が首を差し寄せて、どうぞ一言着すと言つてくれと歎き乞うても、自分は壁の方を向いて、その一言を口に出さずに死んでしまおう。其時は伯母はどんな氣持がするだらうと考へたり、又自分が溺死して髪が濡れて、心の苦がなくなつて、河から家へ連れて來られるとしたら如何だらう。伯母は、必然、死骸に取付いて涙を雨のやうに落して、神様に此子を咎罵しせぬと祈つて、もう／＼決して此子を咎罵しせぬと言ふだらう。それでも自分は冷たく青くなつて

死んでゐて、何の音もさせないでゐやう。とだんだん空想が事實らしくなつて來て、釣り込まれてトムは幾度の涙を呑み込んで、僅かに咽び泣かずにゐた。目には涙が一杯溜つて、四邊が茫として來た。瞬きをすると、その涙が溢れて鼻の先からぼた／＼落ちた。かうやつて悲みを育て養ふのが何よりの道樂になつて、もう俗世界の快樂が邪魔をしに入つて來るのが此上なく、厭はしく思はれた。自分のこの悲憂は世間並の愉快には接觸させられぬ程に、神聖なものとなつた。それ故從妹のメリーが、一週程田舎へ泊りにいつて、やつと戻つて來た嬉しさで、跳り込んで來た時に、トムは立ち上つて陰鬱に、愁を帯びた風で出て去つたそれと入れ違ひに、他の入口からメリーが、影と日光とを伴つて入つて來た。

月曜の朝、トムな情ないと思つた。月曜の朝はいつもかうなので、また一週間學校で苦しむその

苦の始まりだと思ふからなのである。トムは月曜日毎に「遊ぶ日が途中にはさまらなければ宜い。却て束縛不自由の身の上に返るのが辛い。」と必ず思つた。

今日も、トムは臥床の中で考へて居た。病氣であつて欲しいな。もうさうだと、學校を休んで家に居られる。や、之はものになりさうだ。と身體の検査に取り掛つて見たが、何處にも悪い處がない。更に精査して見た。幾分腰が痛い氣味があるので、其方面に盡力して見たが、やがて痛みらしいものが薄らいで、遂に何ともなくなつてしまつた。再び熟と考へるうちに、こんだは良い事を發見した。上の前齒が一體グラ／＼して居た。之は好運だと、手始めに唸りかけやうとして、不圖考へたのは、齒が痛いと思立てたらば、伯母はきつと其を抜いてしまふだらう。抜くと痛いから、齒痛は取つて置きにして、猶よく考へる事にした。暫くは、何も計が浮んで來なかつた。その内に

或醫者の話を思ひ起した。如何とすると、二三週間も病み付いて、其果てに指を失ふやうな恐ろしい事になるといふのであつた。トムは、敷布の下から、痛い足の指を引出して検査したが、其病の兆候を一向心得て居ないので困つた。併し試めして見る價值がありさうなので、勢よく唸り出した。

傍のシッドは何も知らずに眠つて居た。トムは、段々大聲に唸つた。而して、實際足の指が痛み出して來たやうに感じた。シッドからはやはり音沙汰なしである。トムは骨折りで息がせか／＼して來たから一と休息して、又息を吸ひ溜めて、盛に上等の唸り聲を連發した。シッドはやはり軀をかいて居た。トムは腹が立つて、シッド／＼と呼んで揺り起した。それが功を奏したから、トムは改めて呻吟き出した。シッドは欠伸をして、其から身を起こして肱枕で、トムを熟と視て居た。トムは構はず唸つて居た。シッドが、

「トム、おい、トム！」といつても、返事もないで居た。

「おい、トム！如何したの？トム。」とシッドはトムを揺ふては、その顔を氣遣しさうに眺めた。トムは苦しい中から、

「いけない／＼。さう揺かしては。」と言つた。

「如何したの？伯母さんと呼んで來るよ。」

「不用々々！もう直に直るよ。誰も呼んではない。」

「だつて呼んで來ないでは。そんな聲を御よしよ。恐い！何時からこんななの？」

「もう幾時間も。あ……さう動いちやいけない。死にさうだ。」

「トム！何故もつと早く僕を起さなかつたの。

御止しよ。その唸り聲をきくと身が縮まる。一體如何したの？」

「御前の悪い事は皆勘辨してやるよ。(呻吟)何でも御前の僕にした事はね。僕が死んだら……」

「死ぬッて！まさか！御止しよ。もしも…」

「誰の悪い事も皆宥してやる。(呻吟)皆にさう傳へて御呉れ。あの僕の窓枠と片目の猫を、この頃村へ来たあの女の子にやつてね、而して…」

シッドは衣服を急ぎ、纏うて出ていつてしまつたトムは想像に誘ひ込まれて、眞害に苦しくなつて呻吟の聲なども木物になつて居た。シッドと階段を飛ぶやうに降りて、

「伯母さん！来て御くれ　トムが死にさうだ！」

「死にさうだッて」

「あゝ。愚圖々々しないで、直ぐ来て。直ぐ。」

「空事だ！そんな事をほんとにするものか。」

と言ひながら、伯母も二階へ飛んで來た。シッドとメリーもあとについて。伯母の顔は、白くなつて唇は震へて居た。トムの臥床の傍へ來て、息をはずませて

「トムや如何したの。」

「伯母さん、あの…」

「どうしたのさ。エ、如何したの。」

「あの痛い足の指がなやむの。」

老婆は椅子に身を落して、少し笑ひ、少し泣いて、次に同時に泣き笑つた。其で勢が付いて、

「なんと人を吃驚させるのさ。馬鹿聲をやめて御起き。」

呻吟の聲ははたと止むで足指の痛しどこへやら去つてしまつた。トムも少してれて、

「あのね、指がなやんで痛かつたので齒の方はもつとも氣が付かなかつた。」といつた。

「齒だつて！齒がどうしたのさ。」

「一本グラ／＼してゐて、非常に痛むの。」

「宜い／＼。もうその聲は止して御呉れ。口を明いて御覽！成程ゆるんでゐる。だけれど死にはしないよ。メリーや絹糸を一筋と、臺所から火を一塊持つて來て御くれ。」

トムは急いで

「抜いちやいけない。伯母さん、もう痛くないよ。止して下さい。學校を休んで家に居たくはないから。」

「家に居たくない！なんだ、學校を休んで魚釣りにでも行かうと思つて、こんな騒ぎを初めたのかへ。ほんとに／＼、私がいろ／＼可愛いがつてやつても、御前は呆された真似ばかりして私を困らせるのだね。」

その内に齒を抜く道具が來た。老女は、絹糸の一端にわなを作つてトムの齒に引掛け、もう一方の端を臥床の柱に括り付けた。而して、火の塊を急に、トムの顔の前にツと差し寄せた。その拍子に、齒は抜けた。今でもその齒はベッドの柱にぶら／＼下つてゐる。

凡ての苦惱はそれ／＼埋合せのあるもので、朝飯後トムが學校へいつて見ると、前齒の抜けたところから、珍妙な唾の吐き方が出來るとして、皆に羨ましがられる身の上となつた。その演技を珍ら

しがつて、大勢生徒が着き纏つた。今まで、指を怪我をして皆に歎賞されて居た一少年は、其爲に崇拜者がなくなつて、名譽が地に落ちてしまつた。それで詰らながつて、「トム、ソーヤーのやうな唾の吐き方なんか、何でもない。」と心にもない輕蔑の語を漏したところが、「何だ酸い葡萄」(イツツパ物手の届かぬ葡萄をあげつて「酸い葡萄」と惡口をいつた狐の話かして出した語)と他人にいはれて悄氣返つて獨りぶら／＼して居た。

古き世を紋に問はるゝ幟かな
太
藪村はこゝにと立つる幟かな
一
大風の俄かに起る幟かな
子
規